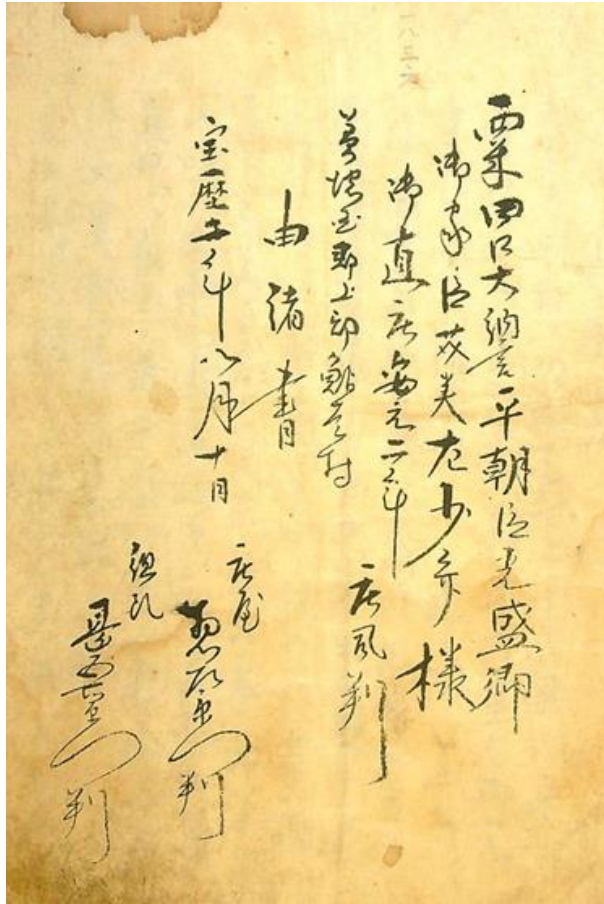


### 3、古代の開拓

#### 鮎走の開拓はいつ頃から？

大洞の森家に伝わる「鮎走村由緒書（宝暦年間に書かれたもの）」があります。

これはその表紙です。何が書かれているのでしょうか。



『粟田口大納言平朝臣光盛卿』

御家臣芥見左小弁様

御直庄 安元二年（一一七五年）庄司判  
美濃國郡上郡鮎走村

由緒書

宝暦二年八月十日

庄屋 惣左衛門判

（一二七五二年）

組頭 甚五右衛門判』

この初めから3行目迄の文を大事にしていたことがわかります。この文書を現代語に訳しました。

#### ○「鮎走」の名前の由来

『美濃国郡上郡鮎走村は、その開基を尋ねると、人皇二十三代の顕宗天皇の治めていた時の第二年に、宮人が流罪となつて連人という者が、住居を岩穴（岩ではなく人の通わない所という意味）に結び始めて住んだ。

その子孫はだんだんと繁殖して、田を開き、畑を墾していたのだけど、都から遠い山中なので、税や年貢を収めるといふことがなかった。

ところが人皇三十六代、孝徳天皇の頃（六四五〜六五四）に、天然の大雨で村の近辺が満水になった事があつた時に、庭中に鮎魚集まって遊んでいたのを生け捕って、そのまま天皇に献上

した。これによって走り鮎魚を税としたので、これを名付けて鮎走という。』

この頃の鮎走は大洞と神道だけでした。

イラスト

最初の鮎を走り鮎といいます。郡上藩の殿様に献上されていたようです。

### ○「下地下」の名前の由来

『平氏の後胤(こういん)、紀伊国より来たものが、沼を干し、畑畠を開き、田を掘る事を励んで、よって「干地家(ひたちけ)」とその所をいい、甚左衛門、甚五右衛門、治郎九郎、孫太郎等であった。これは正暦年中(九九〇〜九九四)のことであった。干地家は後の下地下・古家となった。』

古家・下地下の辺りは沼だったとあります。白鳥の「干田野」

も昔は大きな沼だったそうです。そこを干して田んぼにしたから干田野というと聞いたことがあります。

『その後に、また白雉年中(六五〇〜六八五)、諸国に洪水があり、人が溺れたり家が壊れたりする事あったが、僧定恵(じょうえ)と言う者、諸国の人々を愛して国々を回った。その時、連人(むらじ)の後胤(こういん)はしだいに繁殖して、すでに鮎走の人達で房を開いた者、増助、近造、隼人(はやと)正助右衛門、与三兵衛、助十郎、惣左衛門、助七郎、孫五郎等九人であったが、隼人(はやと)正助右衛門の弟が定恵の弟子となり改名して大瀧房(坊)と名乗った。

当時貢物には、一人に付き布絹三疋(ひき)づつ、名代人(なだいに)をもつて毎年貢ぎ物を納めた(おさ)。その宿を庄屋(むら)といい、芥美殿(あくたみ)に貢ぎ物する使いを組頭(くみづ)という。』

「神道」という地名はどこから来たのでしょうか？

立壁には長良川がぶつかり険しい崖で道がありませんでした。人々は神道から大洞方面へ上り、観音堂のある山をつたって砥坂の方から下地下に下りてきていました。



鮎走にあった神社、奥の宮。(鮎走村由緒書より)

『その後、また奈良の都に始めて遷都して、興福寺を始めて建てた時に、白山を加賀国より僧泰澄たいちようが開登する時に、南門と称えて、長瀧に仮宿していたが、鮎走村の内の東前谷という所に至って、藤葛とうくずのあった所に一泊した。ここを名づけて「藤の森」といった。

ここに大瀧房の仮住房があった。この人の後胤、子孫多く繁殖す。(喜八郎、孫八、与市郎、直右衛門、五郎助、三九郎、与右衛門、孫六) 皆子孫です。

泰澄大師は尋ねて鮎走に行きました。助右衛門に宿をとって七日間。その後に登山し、「下の森」、「奥の森」は皆其遺跡です。これは養老年中ことです。その旧跡霊地だったのですが、聖武天皇の勅ちよくを以て僧大瀧房を別当べつとうとして三の宮地を守らせました。』

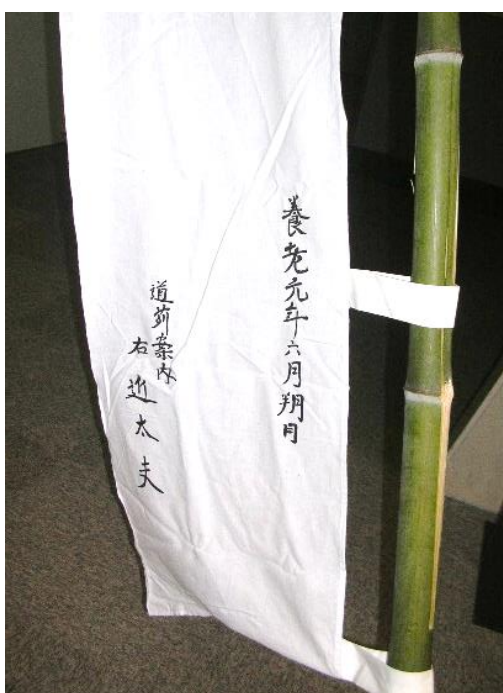
これが藤の宮・下の宮・奥の宮の由緒で、大洞にある奥宮への神の道(白山への道)ということとで神道と名づけられたのでしよう。

どうやら奈良時代には鷲見郷はかなり開けていたようです。その象徴が白山を開闢した泰澄大師です。

### 大師の像のイラスト

『泰澄法師は白山の開基なり。助七が案内してなた、かまに、そ  
たを持って道を刈り先達した。養老元年 六月一日』

### のぼり 幟の写真



れてきたものだと思われれます。

この幟は鮎走白山神社の祭りで立てられていたものです。養老元年六月一日（七一七）と書いてあるので、養老時代から1300年間代々書き継が

○切立真観寺文書 慶長二年（一五九二）  
に書かれていること

『泰澄大師は美濃国の白山往來の道を開かれた。長滝、洞ヶ滝（前谷）より滝ヶ峰（白川郷）まで大日山のふもとをめぐって工夫をこらされた。ある夜大日山に一泊なされて、翌日夢に老人が出てこられて、「あなたを永いこと待っていた。ここに大日如来の堂を建ててほしい」と言われた。東のふもとへ降りられて、一つの沢があつて蛭が群がり出てきたので祓いしりぞかれた。ここを蛭ヶ野と言つた。そして案地（事）ヶ峰に登られて越前石徹白への道は阿弥陀が滝（洞ヶ滝）しかないと言われた。

白川滝ヶ峰まで行かれて戻られ、阿弥陀が滝を開き、夢のお告げにしたがつて、大日ヶ岳に金像の大日如来を安置されました。（七二七年）

その時、そこから西方に集落が見えるので、西洞と名づけ、さらに白鳥をめざして下りられました。途中最初に住家があるのが初の洞（正ヶ洞）、あの洞（穴洞）と名づけ、そこから霧が湧きたつふもとに集落があるのに気づかれて霧立（切立）と名づけて南宮社を建てられ、中島（向鷲見）に若宮を安置され、逢走（鮎走）、正ヶ洞、穴洞の三か所に白山三社を安置され、白山中宮長瀧寺に向かわれたと伝えられています。』

白山中宮長瀧寺は養老二年（七二八）の創建です。講堂の本尊



は大日如来、脇侍は釈迦如来と阿弥陀如来です。とても大きな大仏（一丈二尺三、六m、蓮台九尺二、七m）だったそうですが、惜しくも明治32年に焼失してしまいました。大日ヶ岳と長龍寺の密接な関係が見えてきます。

（良い写真は無いでしょうか？）

泰澄大師については改めて取り上げます。

次の江戸時代の西洞の地図を見ると、ひるがのには大きな沼があります。真ん中の黄色いところが上野高原です。当時は一面に松が生い茂った林だったそうです。松は建材や燃料として必要でした。

案事ヶ峰 此下炭埋 四本杭 御国境



「西洞山論絵図」 寛政二年

ひるがの

真ん中の赤道が白川街道。 下に西洞山道、穴洞山道、向鷺見道とある。

## 穴洞の開拓はいつ頃から？

「穴洞白山神社累縁起」より

『穴洞鎮守白山妙理大権現（現在大鷲白山神社に合祀）の始まりをくわしく尋ねてみると、昔、上井形部左衛門尉平良忠の夢の中に出現されたおつげであります。

人皇六十一代朱雀院の御宇、天慶年中（九三八年から九四七年）に亡んだ平親王将門公の一族で、下総国（千葉県）猿嶋郡上井郷の内裏の一戦をのがれ、数十里の山谷を踏分け当地へ落ちのび、ひそむに今の伏兵ヶ野（高鷲保育園のある所）についての屋敷をかまえた。

名を山河と改め、月日を送っていたところ、承久年中武蔵権守頼保へこの庄を上より下され、地頭として統治したので、この時、今の喜八会津へ屋敷をかえ、民家に下り、与四良と名のつた。

さる天慶三年（九四〇年）酉の八月一三日の夜五更（夜明け前）頃に、良忠は神のお告げを得た。その夢は、かたじけなくも衣冠正しき八十才ばかりの老翁が枕元に立ち、告げて言った。

「汝よく見よ、ひとつの奇瑞があるだろう。急ぎここにひと

むねの家を建てるべし。そうすれば、汝のさかえを末永く守ろう。」とおっしゃる声がして雪空へ消え失せられたのを見て夢から覚めた。良忠はおそれおおく思い、乾の高窓へ杉の高い傍らの方を見ていたところ、不思議なことに西南の方の大岩より火玉らしいものが落ちて当村ことごとく振動して良忠の城の北東の方に落ちた。（昔白山開闢の時泰澄大師腰掛石）良忠は驚いて、そばによって見れば、その長さ三寸有余（一〇cmほど）の金色に光り輝くお身体が一つの石の上におられた。

良忠それを見てお告げの通りと思い、夢告にしたがって建物を建立し、白山妙理大権現の守護所を鎮座し奉った。』

この累縁起を見ると、穴洞の開拓は平安時代の真ん中ごろから始まったと言われています。この平将門の伝説は各地に伝わっているようですが白山信仰と結びついています。

次ページは穴洞村の江戸時代末の地図。上の左にある神社。その右が「良忠の城」で、内ヶ島氏が攻めてきたとき出てきました。「喜八会津」は図中央下の「くはち洞道」の付近だと思われ



西洞道

上野道

ワミシ川

白山神社・良忠が城

取手ヶ野

田と畑は高さが異なる

井道

北

御高札

井道

クハチ洞道

中切道

向スミ道



鷲見の開拓はいつ頃？

「市兵衛文書（鷲見白山神社由来記）」より

『美濃国の北隅、郡上郡上の保谷の奥の洞、鷲ヶ岳の山麓に大屋某という者がいた。山中の開祖でその初めを知る人はいない。仁平年間（一一五一）にはここに居住するという。慧心僧都作と伝えられる白山妙理大権現の神像を授受して一室の傍に小祠を建て安置しておられた。この神像は、老いたきこりを憐れみ、干し草を刈っている人を救い、靈験あらたかなること数多くあった。

治承、養和（一一七七年から一一八一年）の昔、竹の園の連枝なる人（皇族）、貶せられて鷲ヶ岳の麓に来て、大屋によって育てられた。勅免を蒙り（許されて）一所の主となり姓を鷲見と名乗った。

世々相継ぎて年暦いよいよはるかなり。当社は崇敬して加被力をこいしますます武威を躍す。建武歴応の乱には土岐氏の旗下となり応仁文明より佐々木氏に属す。或いは斎藤龍興に随い武運衰えず。郷民、君と唱えて貢献すること久し。盛者必ず衰える。天正の初めの歳、襲敵のために首を授け家門を絶つ。惜しむ

べし。』

とあり、これによると鷲見氏は皇族であったが流されて鷲見村に来て大屋の助けを得、やがて鷲見郷を下賜されたとしています。（高鷲村史）

この大屋氏は山口才三郎と名乗っていました。次は鷲見の敬願寺に伝わる先祖の山口才三郎の伝記です。

○敬願寺文書より

『昔々、鷲見のいわれを探ってみると、神武天皇より三十代敏



達天皇時代(今日より千四百十四年前)に、大和国殿上人藤原少将満近の子孫で藤原左衛門尉が武者修行に出て諸国を遍歴していた。

その途中で美濃国武儀郡(斉衡二年より郡上郡となる)飛騨国の境まで来た時に雲ヶ嶽の麓の霞ヶ洞と言うところで休憩し昼寝していると、夢なのか現実なのか、老人が来て、この地は由緒があるから住むべしと言って、夢が醒めた。

藤原左衛門尉が思うに、このような不思議な夢を見るものだろうか。このような深山で夢を見るのは面白い。元来勇猛剛胆な人であるから、ここに住み居を構えた。山の麓に柴の庵を建て、山畑をして暮らした。飛騨国の某から妻を迎え、一子を設け山の麓に住んだという由緒から山口才三郎と名乗った。

その頃は法相宗長瀧寺に属していたが、天長五年(八二八)に白山中宮長瀧寺が天台宗に改宗なされて、才三郎盛長は、その後白山妙理大権現十一面観音自在尊を日頃から信じていたので、正応三年(一二九〇)長瀧寺白山中の社やしろを普請した。

これが出来たその社の内、養老七年(七二二)、四四代元正天皇の時代に、奈良の都より下りいただいた元正天皇の一刀三礼の十一面観音が、ある夜、才三郎の夢のお告げで「長瀧寺へ迎えに来なさい」と見て、夢が覚めた。

才三郎は大変ありがたい夢であると思つて、すぐに長瀧寺へ

一目会いに行つて十一面観音の祠に立ち寄り、礼拝したが十一面観音様は現れず不審に思い、お堂の縁側に出ると縁側に十一面観音様が現れ、才三郎はその像を拝み奉り礼拝して敬虔にお祀りして家に帰った。

これが鷲見村の氏神である。後に長瀧寺の配下となりました(長瀧寺に戻し、今は長瀧寺にあつて鷲見村にない)』

郡上郡は武儀郡の上にある郡ということで、斉衡二年(八五五)より郡上郡となりました。

このように、奈良時代や平安時代についての記録が残っていますが、いずれも後から書かれたものです。

次に平安末から鎌倉時代、室町時代、戦国時代について調べてみましょう。

ここからは、日本史全体との関連も出てきます。山間の鷲見郷でも列島の中央の動きと密接に繋がっていきます。

		鷺見郷(氏)に関する年号表					高鷺村史・八幡町史による			
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1160	永暦 <small>鷺見城?</small>	応保		長寛		永万	仁安			嘉応
70		承安				安元	鮎走文書	治承	治承・寿永の乱	
80		養和 <small>清盛死</small>	寿永	鎌倉幕府	元暦	文治 <small>守護・地頭</small>	一壇ノ浦			義経死
90	建久		頼朝征夷大将軍	曾我兄弟						正治 <small>頼朝死</small>
1200		建仁	重保死	関東下知状①	元久 <small>頼保死</small>	一頼家死	建永	承元		
10		建暦		建保						承久 <small>実朝死</small>
20		承久の乱①	貞応		元仁	嘉禄		安貞		寛喜
30			貞永 <small>家保死</small>	天福	文暦	嘉禎			暦仁	延応
40	仁治			寛元			宝治			建長
50		芥見庄(大鐘)		鷺見城(大鐘)			康元	正嘉		正元
60	文応	弘長			文永					
70					文永の役	建治			弘安	
80		弘安の役				保吉諸保大番役②			正応	
90				永仁						正安
1300			乾元	嘉元			徳治		延慶	
10		応長	正和					文保		元応
20		元亨			正中		嘉暦			元徳
30		元弘	(正慶)	御家人忠保③ ④幕府滅ぶ	建武		延元 <small>忠保活躍</small> ⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪	忠保地頭①	(暦応) 青野ヶ原	頼貞死
40	興国		(康永) <small>頼遠死</small>	忠保死 保憲阿千葉へ		(貞和)	正平			
50	(観応)①	保憲×加賀丸 直義死②③④	(文和)⑤⑥⑦				(延文)		尊氏死	
60		(康安)	(貞治)						(応安)	
70	建徳		文中			天授(永和)				(康暦)
80	(永徳)	弘和			元中(至徳)			(嘉慶) <small>保憲死</small>	頼康死	(興応)
90	明德) <small>禪峯地頭⑧⑨</small>		禪峯×伊賀⑩		応永					
1400	氏保×安東⑤								義満死	赤谷山城
10						北畠の乱氏保⑥ 加賀丸(禪峯)死				
20									正長	永享
30										
40		嘉吉 <small>益之死</small>			文安 <small>氏保死</small>					宝徳
50			享徳			康正	常縁関東へ	長禄		
60	寛正						文正	応仁	篠脇城落城	文明
70		蓮如吉崎・古今伝授							北野城	
80					常縁死			長享	一向一揆	延徳
90	義政死		明応		行保死・保兼					蓮如死
1500		文亀			永正					
10	保重死							保定死		
20		大永							享禄	
30			天文							三木侵入
40	朝倉来攻	貞保死	東殿山城?					土岐氏追放		
50						弘治	道三死		永禄	東殿山の戦い
60			盛教死		八幡城の変	義輝死		井ノ口→岐阜		三木侵入
70	元亀 <small>姉川の戦</small>		信玄死	天正		金森越前攻撃				
80			信長死			金森飛騨征伐 天正大地震			稲葉氏	
90			文禄 <small>の役</small>	太閤検地			慶長	慶長の役	秀吉死	
1600	八幡城の戦い			江戸幕府						
10					冬の陣	元和 <small>夏の陣</small>	元和郷帳・家康死			
20					寛永					
30			慶隆死							
40					正保				慶安	
50		家光死	承応			明暦			万治	
60		寛文								
70		五人塚作成		延宝			常友死			
80		天和			貞享				元禄	
90			井上氏					金森氏		

( )は北朝。太字は双方兼ねる。丸数字は「足利将軍よりの感状写」の順番 アルファベットは鷺見家譜。